
themoon another sun

針鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the moon another sun

【Zコード】

Z9554F

【作者名】

針鼠

【あらすじ】

魔法がまだ栄える世界——「バンディル」この世界エバンディルは4つの国に分かれている。まずは、女神と銀の騎士の伝説で名高い帝国——砂漠に囲まれたオラシル国——鍊金術、商業の国工クスティア——エルフの住む聖地アルヴァース——空に浮かぶ魔法使いの国——フィリタニア···この物語は魔法使いになる人の少女のお話。

星が一つ生まれた。

濃い霧の中に小さな黒い一つの影が生まれた。

馬の蹄の音でさえこの濃密な霧に吸い込まれそうだ。急いでいるのだろう。鞭を使って馬を急かしている——一頭の馬の主

たちは黒いマントを羽織りまるで死神が舞い降りたようにも見える。二つの黒い影は霧を切って進み小さな門の前で止まった。

その小さな門の前では、でっぷりと太った男がぽつりと立っている。男の隣には息子だろうか。男の後ろに少年が恥ずかしそうに隠れている。

男は、一頭の馬の主を見ると人の良さそうな笑みを向けながら丁寧にお辞儀をした。

「ささつ、こちらへどりや。じゅルカーぼおつと突つ立つてねえでお馬をお連れる……」

ルカと呼ばれた少年は、男に小突かれて半ば這い出るよつとして馬の手綱を引いた。

小さな門をくぐると質素ながらも住みやすそうな石造りの家が見えてきた。

一頭の馬の主は、黒いマントを翻しながら地面に降り立つた。

「何日か——泊まらせて頂きたい・・・もちろん、食事代・・・宿

泊代はこちらが払う

「へえ——承知しましたです」

の人たちの身体にはおいらたちと同じ血が流れているのかな。——もしかして本当に死神だったりして・・・

「ルカ!!!!早くしねえとぶん殴るぞ!」

男が、大きな拳を上げたのでルカはまるで放たれた矢のよつに早く馬のもとへ向かつた。

馬は疲れているらしく酷く機嫌が悪い。ルカは力を込めてやつとこさ馬小屋に運んだ。

馬小屋を出ると辺りが霧で覆われていた。

深い——深い——深い···霧···

···

こんな霧——始めて見た。

少年は目をぱちぱちさせ濃厚な霧に触れてみた。まるで朝、母さんが入れてくれるミルクのようだ。

指が一本濃い霧の中に消えた。もっと奥に入れてみよう——

——少年はそう思い腕を濃厚な霧の中に沈めた。

面白くなつて少年は、手を出したり入れたりした。

声が聞こえて来た——遠くから微かに聞こえてくる···段々···段々···大きくなる···まるで悲鳴のよつな···鳴き声のよつな···大気を引き裂く声

馬たちが怯えている。

何かが——何かがおいらの霧の中にある手を掴んでいる。

霧の中に···”何かいる”···

ひんやりと冷たいその手は少年の心をだんだんと凍らせていく。

——あの二人···やっぱり彼らは死神だったんだ。

——奴らを連れてきてしまった。

卑しい暗闇の存在である普段心にも気に留めない

···

掴まつてしまつた!——!——!——!——!——!

少年は濃厚な霧に吸い込まれていった。

骨董店シャム・ラジエリーの店

——星が一つ生まれた。

帝国の妃に待望の男児が生まれたのだ。帝国では、日々王子誕生を祝う祭りが行われているらしい。

空に広がる色とりどりの花火——音を奏でる楽師たち——舞を舞う踊り子——

辺鄙な村にも帝国の新しい王子誕生を祝う神官が訪れ村を上げての祭りが行われることになった。

帝国の民草——王族、貴族・・・皆が王子誕生を祝っている。

メリーは、人々が祝うその様子を窓から息を潜めてじっと見ていた。

——骨董店シャム・ラジエリーの店・・・古びた看板が風に揺られてぎこぎいと鳴いている。

いつも人寂しいこの骨董店は例外がお祭りで賑わおうと店内は寂しいままだった。

メリーは、溜息をつくと持っていた雑巾で埃の被つたひび割れた花瓶を拭いた。毎日、毎日掃除をしてもこの店は何処からくるのか分からぬが埃だらけだった。

地下室から、小さな鼻歌が聞こえる。

もちろん、誰だか分かっているけど・・・

「シャム」

白い立派なお髭にターバンを巻いて額にはきらきら輝くルビーをはじめている店の店主シャムは少女に名を呼ばれて老人シャムは、ぼさぼさの白い眉を上げた。

「まう、メリー。夕飯かね?」

ぼんやりとそう言つ老人にメリーはため息をついた。

「さつき食べたわ。シャム・・・・それより、今日は閉店しましょ
う。」この様子じやあ鼠一匹この店を見る」とはないわ

「つむ

シャムはいつもどおりぼんやりと返事をすると大きな椅子にどしどと座つた。

手には、一冊の古びた本——メリーは絶句した。

この世界エバンティルは4つの国に分かれている。まずは、女神と銀の騎士の伝説で名高い帝国——砂漠に囲まれたオラシル国——鍊金術、商業の国エクスティア——エルフの住む聖地アルヴァース——空に浮かぶ魔法使いの国——フィリタニア···
この世界には、エルフ族、竜族···さまざまな種族が住んでいる。
しかし——帝国は、エルフ族、竜族···人族以外の帝国領土定住を禁じている。もちろん、彼らに關わる書物、その他の書物、文字、算術、芸術は、民草には無用といいすべてその土地の貴族が没収ということになつてゐるのだ。

民草が他の種族の芸術・哲学を学んではならない···集めてはならない。

民草が他国を見ることはならない。

民草が人族以外に關わってはならない。

これらを破れば良くて監獄に悪くて死罪に

この骨董店だつて違法ぎりぎりだというのに本だなんて！内容しだいでは國に仇名す敵として死刑にされる。

「シャム！また本を買つたの？？」

メリーは、叫んだがシャムはずつと本に齧りついたまま動かない。
こうなると空から火が落ちようが地震が来て大地がひび割れようが關係ない。

メリーは、溜息をつくしかなかつた。本なんて高額だつたはずだ。
何時も赤字なこの店の何処にお金があるんだろう。この店を振れば1ギヤロぐらゐ落ちてくるだろうか。

「メリー、今日はもう遅い。店じまいはわしがしておくから先に寝ていなさい」

「分かった、でもこの壺を地下室に片づけてから寝るね」

そういうつてメリーは、大きな壺を持ち地下室へと降りて行った。店が埃だらけなら地下室はもつと埃だらけだ。メリーは、慎重に階段を降りると壺を地面に置いた。

メリーは、今年で16となる。10年間、シャムのもとで読み書きの勉強をしたり骨董を売る手伝いをしてきた。だけれども、メリーの心の中に希望という波が満ちたりひいたりしていた。

——帝国の外へ出てみたい。外の世界を見てみたい。

美しいエルフ達——神秘に満ちた魔法使いたち……シャムから聞いたり本を見せたりしてもらっているうちにメリーの胸にはそんな小さな希望が宿った。

その希望は、年々メリーの小さな胸の中で大きくなるばかりで時折押しつぶされそうになる。

でも、そんなの一生無理ね。今まで……メリーが、諦め首を振ったその時だった。

ちらりと店のベルが鳴る。

——お密さんかしら……

こつこつこつこつと靴で歩く音が聞こえる——壺を見ているのか足音は止まつたり歩いたりしている——数歩歩くとその足は急に止まつた。

「シャム・ラジェリーか？」

低い声が聞こえた。

地下室といつてもここは陳家な骨董屋。板一枚挟んでいるだけで声と足音はしつかりと聞こえてしまつ。

「おや、おやお密さんですか……」

シャムの声が聞こえる。シャムに任せていたらお密に逃げられてしまつ。私も、早く行かなくちゃ——メリーは、壺を急いで片づけて階段を上つた。

「全く……百年ここを離れただけで主人を忘れてしまつとは……」

溜息をつきながら男は言つた。

主人——？？不穏な空氣にメリーの階段を昇る足がぴたりと止まる。

「我が名のもとに大地の精グノミードに命ずる——任を解きかの地へ戻れ」

男が、ふわりと手を翳すとシャムは驚いた顔をした——そして、シャムの体はぱらぱらと崩れだした。そして、白銀の砂へと変わつた。

「——」

メリーは、悲鳴を抑えた。シャムが、シャムが砂になつてしまつた。心臓がどきりどきりと高鳴つて抑えきれない。

こつりこつりと男がこちらへ歩いてくる。

「僕はやつぱり反対だ」

声がした——不満そうなそれでいて溜息まじりにでてしまつたような小さな声だつた。

不満の声に耳を傾けずにマントの男は、シャムが先ほどまでも座つていた椅子に座つた。

男は、ゆっくりと腰掛け足を組んだ。

なおも声は、不満そうにいう。

「一体、君は何を考えている？？？何を何処だと思つてるんだ・

・・帝国領士だぞ」

「だから、何だつていうんだい。ジルマ」

マントを被つている男が初めて口を開いた。

「分かつてゐるのかい？」——は、帝国領地・・・君は、魔法使いなんだぞ？」

「なんどこのや深いため息をついてジルマーーが小さな声でいった。

「ならば、君も気をつけることだ。話す鼠なんて滅多にいない」

—— 小さな鼠が男のマントから顔をだした。真っ白い—— 白い鼠だった。

「ほつといてくれ、ルネ……これは個性の問題だ」

胸をはつてこの小さな旧友はそついた。アーディルネは、くつろぐように優雅に指を組み足を組んだ。

「で……何が反対なんだい。僕の可愛い鼠ちゃん」

「今の新王が立つ前ならまだしも……今はここに立ち寄るのは反対だといってる」

くづくりとした黒い大きな目がアーディルネを映した。魔法使い—— ?? 魔法使いが何故帝国領土に……

騎士に伝えなきや……

メリーやは、ゆづくり歩き出した。見つからないようにしなければ私もシャムのように砂に変えられてしまつ。

しかし——この店は随分と古く普段氣にもしなかつた床で歩く自分の靴の軋む音が今のメリーやには大きく聞こえる。
ぎしりと—— 大きな足音が自分の足元から鳴つた。

「? · · · 誰かいるのか」

まつ白い鼠—— ジルマーーが言つた。ああ—— なんてことをメリーやは心中で叫んだ。

「どうやら、御客様がいるようだよ……ジルマーー……」

男—— アーディルネは、立ち上るとメリーやの近くへと歩いてきた。メリーやは、壺の裏に隠れたまま動けずにいた。

「おや、おや……これは、これは……」

男が面白やうなそれでいて驚くよくな声をあげた。

見つかつた—— もう終わりだ……メリーやは男に釘づけになつた。豊かなウェーブの青みを帯びた漆黒の髪—— 鼻筋がしつかりと通つていて瞳はサファイアのよとに目を引く青色—— 口ひげを綺麗に整え柔らかく笑うことのなんと優雅なことだらう。

これが、魔法使い……

メリーガ、ほやりとアーディルネを見つめているとアーディルネが手を動かした。

「いや！やめて！……殺さないで……」

メリーや、叫んだ——シャムのように砂にされてしまう……しかし——アーディルネは、何処かの舞踏会に招かれた貴族のよう丁寧に挨拶をした。

「こんな可愛らしいお嬢さんにお会い出来るのは光榮だ」

にこりと笑う美しい紳士にメリーや、首を振った。

「そんなことして……またシャムさんの時みたいに私を殺す気なのね！酷いわ！！魔法使いつてそんなものだったなんて……」メリーやが叫ぶとアーディルネたちは、ぽかんと口を開けた。最初に口を開いたのは、ジルマリーだった。

「ルネ……アーディルネ……彼女は、勘違いをしているようだよ」

「？・・・何をかね？？」

アーディルネは、分からないと首を傾げる。ジルマリーは、溜息をついた。

「僕たちに殺されると思つてる……彼女」

「おお、この私が？・・・君を？・・・まさか、そんなことする訳がないだろう？・・・もともとここは私の店でね。魔法で地の精靈グノミードにこの店を守るよう命じていたんだよ」

メリーやは、ぽかんと口を開けた。

「精靈……？グノミード？・・・じゃあ、シャムさんがその精靈だったっていうの？？？」

「信じられないかい？」

にやりとアーディルネは笑つて見せた。からかつているんだろうか？この人は……

メリーやは、声を荒げた。

「当たり前よ！精靈なんているはずが……だつて朝だつてシャム

さん一緒に朝ごはんを食べて・・・

そうよ・・・十年間一緒にいたのに・・・シャムさんが妖精だつたなんて信じられない！！

「よく食べただろ？彼らは食い意地が張つている」

「そんなの・・・そんなのつてないわ・・・」

やつぱり、信じられない――そりやあシャムさんは食い意地は人

一倍張つていたと思うけど・・・

「それよりも、私が驚いてることはグミニードが君と暮らしてい
たことだ・・・私はこの店には誰も近づけないように結界をかけて
おいたし・・・そう、やすやすとその結界を踏み越えたとしてもグミ
ニードがこの店に入ることを許さない」

「あ――だから店の中はいつも誰も人が入つてこれなかつたんだ。」

アーディルネは、少し考えるように首を傾げると疲れたのかまた椅子にゆつくりと座つた。そして、思いついたのか手をうつとメリーを指差した。

「ああ、もしかして同業者？」

「違います！」

メリーは、声を上げた。すると、ジルマーニの大きな栗のような黒い瞳でメリーをじつくりと見つめた。

「ルネ・・もしかしたらこの子は魔力を持っているのかもしれないぞ」

その答えにアーディルネは頷いた。

「うむ、そうか・・それなら頷ける」

魔力――??わたしが・・・??メリーは、驚いて口を開けたままだったことに気がつかなかつた、アーディルネに名前を聞かれるまできつと気がつかなかつただろう。

二人は、お互に何か話し合つてている。

でも・・・私が魔力を持っている???.?そんな・・・馬鹿な!!
だって、私は何も出来ない。出来ることといつたら料理と裁縫だ・・

・それと、自慢ではないがこの帝国では珍しく読み書きが出来るの

だ。

「君の名前は、何かね？」

メリーガ、考えに耽つてゐる間にアーディルネたちは話し終えてメリーセじつと見つめていた。

「え・・・私の??」

声が少し震えているのに少し顔を赤らめながらメリーアは言つた。

「そう、お嬢さんのだよ」

アーディルネは、頷いた。

「私・・・メリーセっていいます」

何で・・・何で・・私の名を聞くんだろう・・・

「うむ、では、メリーア君・・・唐突だと思つが私の弟子にならないか?」

メリーアは、卒倒した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554f/>

themoon another sun

2010年10月28日04時37分発行